# みどりのこえ

2021 春号 No.62

発行　長野県環境保全研究所
令和3年(2021年)3月20日

編集　長野県環境保全研究所　自然環境部(飯綱庁舎)
〒381-0075　長野市北郷 2054-120
TEL.026-239-1031　FAX.026-239-2929
E-mail:kanken-shizen@pref.nagano.lg.jp

「木曽馬の里（木曽町）」で飼育されている木曽馬たち

## もう一度考える。木曽馬の保存。

文・写真　髙須 正規

先代教授のカバンをもって牧場をまわるうちに、気づくと木曽馬の保存活動に関わっていました。木曽馬は長野県南部から岐阜県東部で古くから飼育されてきた在来馬であり、かつては木曽の人々の生活に欠かせない存在でした。しかし、戦後の生活様式の変化や機械化が原因で、現在では約 150 頭を残すのみとなっています。この馬は、木曽の気候や風土に合わせて改良されてきた地域固有の遺伝子資源であるとともに、木曽の歴史を反映する生きた文化財としての価値を有していることから、地域の生物多様性ならびに文化多様性に寄与する存在とされています。

木曽馬の寿命は 25 年以上あります。このような生き物を、誰が、どのように飼育していくのか？ を考えると、安直に「木曽馬を残すべきだ」とは言い切れません。それでも、もし地域の人々がこれからも木曽馬とともにあり続けることを希望するのならば、まず、「人々にとって木曽馬とはどのような存在なのか、彼らは木曽馬をどのようにしたいと考えているのか」を知らねばなりません。そうでなければ、理念的な正しさを、関わってしまった人々へ一方的に押し付けることになってしまいます。

環境に関する問題の多くは、単なる自然科学的な問題ではなく、社会問題であるといわれています。感染症を抑えたければ、ヒトの活動を停止する必要があります。しかし、ヒトが生きていかなければならない以上、経済活動を止めることは困難です。このように考えると、いわゆる科学的に正しいことであっても、総合的に判断すると 100%正解とも言い切れません。

持続可能性をもって木曽馬の保存を進めるためには、地域の人々とともに木曽馬をどうしていったら良いか？ を考えていく必要があります。容易ではありませんが、多様なステークホルダーが納得できるような、新たな木曽馬の文脈を探っていきたいと考えています。

（たかす まさき／岐阜大学応用生物科学部共同獣医学科・准教授）

Contents

【巻頭言】もう一度考える。木曽馬の保存。(髙須正規／岐阜大学准教授) … 1
【Information】諏訪盆地の過去の環境を探る …… 2
植物標本庫(NAC)データの収集・公開・活用 …… 4
【信州自然ガイド】№10 開田高原 …… 6
【みどりのフカヨミ】生物文化多様性 …… 8
【コーヒーブレイク】南極と長野と風と雨と …… 9
【Report】信州自然講座 を開催 …… 10
山と自然のサイエンスカフェをオンライン開催 …… 11
【お知らせ】令和3年度の研究所イベント案内 …… 12
信州環境カレッジにあなたも登録しませんか？ …… 12